

歴史的街並みにおける年代別デザインコードの抽出と助成基準の提案 —大分県竹田市城下町地区における景観ガイドライン策定に関する研究 その2—

準会員 ○永友拓実^{*1} 正会員 姫野由香^{*2} 同 清川智裕^{*3} 同 後藤大輝^{*3} 準会員 畑早和^{*1}

7. 都市計画—6. 景観と都市デザイン 都市計画

文化財保護法 伝統的建造物群保存地区制度 デザインコード 助成基準

1 はじめに

1-1 研究の背景

日本は戦後、高度経済成長等による国土開発や無秩序な都市化に対して、歴史的な町並みを保存するために、1975年に文化財保護法が改正され、伝統的建造物群保存地区制度が設けられた¹⁾。また、重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)に選定されていない一部自治体では自主条例制定等の自主的な取組を行い、景観の整備・保全に努めてきた。

また、保全対象となる建築の年代、様式が限定的な重伝建地区では、保存活用計画内に修景、補助基準等が定められており¹⁾、保存するべき方向性が比較的明確である。一方で、重伝建地区に選定されておらず、歴史的な町並みが残るものの、多様な建築年代の建築物が混在している地区では、景観の目指すべき方向性を示すことが困難な場合もある。このような自治体では、助成すべき行為や目指すべき景観が不明確である。

林ら²⁾の研究では、地区の景観特性や建築様式などを適確に反映していない助成基準は、運用に支障を来す要因となると指摘している。また、地区の景観特性や建築様式を適確に反映した助成基準の手引き書となるガイドライン等を作成することが重要であるとしている。つまり、適切な助成審査を行うには、地区の特性に即したデザインコード^{注1)}を抽出することが重要であることがわかる。

ガイドラインに多様な建築年代のデザインコードが示されている事例として、東京都台東区の「谷中地区景観形成ガイドライン」がある³⁾。谷中地区景観形成ガイドラインでは、江戸期の和風町屋と長屋、大正期の看板建築が特徴の洋風町屋と独立小住宅、明治期の茶屋と屋敷、昭和期の木賃アパートなど、各年代のデザインコードが示されている。

このように、保存対象となる建築年代とデザインコードを明確にすることが重要である。

1-2 研究の目的

そこで本研究では、多様な建築年代の建築物が混在している大分県竹田市城下町地区(以下、竹田城下町地区)を研究対象地とし、同地区の江戸期、明治大正期、昭和前期、昭和後期以降の各年代のデザインコードを抽出し、今後の助成基準を提案することを目的とする。

2 研究の方法

2-1 研究の方法

本研究では、建築年代が特定できる建築物^{注2)}を対象に、現地調査を行い、江戸期、明治大正期、昭和前期、昭和後期以降の各年代のデザインコードを抽出する(3章)。3章の調査結果を基に、各年代の建築物に共通するデザインコードを継承するための助成基準を提案する(4章)。

2-2 研究対象地

竹田城下町地区は、重伝建地区に選定されておらず、多様な建築年代の建築物が混在している。一方で、景観法制定以前(1997年)から自主条例に基づいた「竹田市地区町並み形成景観・修景ガイドライン」(以下、竹田修景ガイドライン)を運用し、修景に対する助成を行ってきた。また、竹田市景観計画の景観形成の方針の1つに「各時代の建物の良さを引き継ぐ」⁵⁾とある。しかし竹田修景ガイドラインは、この計画の策定以前に定められており、多様な建築年代の建築物が混在しているという現状に十分適したガイドラインとはいえない^{注3)}。そのため、今後の竹田修景ガイドラインには各年代のデザインコードを明記し、そのデザインコードに基づく助成基準を定めることが重要である。そこで本研究では、竹田市景観計画において「町並み景観エリア」として景観形成重点地区に指定されている竹田城下町を

Propose subsidy criteria based on chronological design codes for the buildings on the historic townscape.

A study on the Formulation of Landscape Guidelines in Guidelines in Taketa castle town, Oita Prefecture -Part 2

NAGATOMO Takumi, HIMENO Yuka, KIYOKAWA Chihiro, GOTO Daiki, HATA Sawa

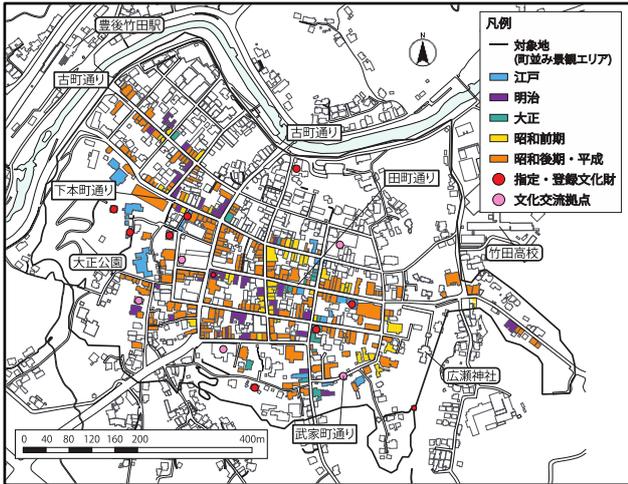


図1 建築年代ごとの外観構成要素

3 各年代のデザインコードの抽出

3-1 調査概要

竹田修景ガイドライン(1997年)⁴⁾において、特定できる建築物^{注4)}258棟を調査対象とした。調査方法は、対象建築物を目視で現地調査し、外観意匠を記録した。現地調査は、2024年8月～10月に実施した。本章では、現地調査の結果より、竹田修景ガイドライン⁴⁾における建築物の形態・意匠として規定されている「屋根」・「外壁」・「出入り口・窓」の外観構成要素に着目し、建築年代ごとの傾向を把握する(表1)。さらに、この結果より各時代のデザインコードを明らかにする。

3-2 各年代のデザインコード

各年代のデザインコードを明らかにするために、258棟の建築物を対象に、建築物の外観構成要素の項目(表1の①から⑱)を整理し、各項目の意匠が見られる建築物の割合を調査した。その結果を、建築年代ごとに集計したものが表1である。以下、①から⑱窓周り意匠の使用割合を把握する項目である。そのため、窓なし及び該当なし^{注5)}の割合は、窓及び窓周り意匠の使用割合を比較する際の対象外とする。

【屋根】表1.①②より、屋根の葺き方は、全年代を通じて過半数を占め、瓦葺きが最も多く使用されている。特に江戸期では100.0%を占めており、明治期から昭和前期では70%以上である。また、屋根形状は江戸期では入母屋が最も多く使用されている。明治期から昭和後期・平成では共通して切妻が最も多く使用されている。

【外壁】表1.③④より、外壁は、全年代を通じて白色が最も多く使用され、江戸期から明治期では漆喰が最も多く使用されていた。一方で、大正期には漆喰と複数の仕上げが混在する複数が同割合で35.3%を占めている。

表1 建築年代ごとの外観構成要素

時代		江戸	明治	大正	昭和前期	昭和後期 平成	
サンプル棟数		11	37	17	40	153	
屋根	①形状	切妻	27.3%	45.9%	41.2%	37.5%	44.4%
		入母屋	36.4%	8.1%	5.9%	22.5%	2.6%
		複数	18.2%	21.6%	35.3%	32.5%	22.2%
		その他	18.2%	24.3%	17.6%	7.5%	30.7%
	②葺き方	瓦	100.0%	70.3%	82.4%	70.0%	59.5%
		縦	0.0%	2.7%	5.9%	15.0%	7.2%
横		0.0%	2.7%	0.0%	5.0%	7.2%	
複数		0.0%	8.1%	5.9%	2.5%	2.0%	
その他		0.0%	16.2%	5.9%	7.5%	24.2%	
外壁	③仕上げ材	漆喰	45.5%	27.0%	35.3%	15.0%	9.2%
		吹付	0.0%	18.9%	11.8%	7.5%	28.8%
		サイディング	9.1%	10.8%	0.0%	12.5%	17.6%
		複数	27.3%	21.6%	35.3%	37.5%	26.1%
	④色	白	63.6%	51.4%	58.8%	40.0%	50.3%
		黒	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%	1.3%
		茶	27.3%	18.9%	11.8%	20.0%	17.0%
		複数	0.0%	27.0%	29.4%	27.5%	24.2%
		その他	9.1%	2.7%	0.0%	10.0%	7.2%
		戸	27.3%	45.9%	35.3%	27.5%	37.3%
⑤意匠	戸(枠のみ)	0.0%	16.2%	17.6%	10.0%	19.0%	
	格子戸	63.6%	16.2%	29.4%	27.5%	17.0%	
	複数	9.1%	13.5%	17.6%	32.5%	22.2%	
	その他	0.0%	8.1%	0.0%	2.5%	4.6%	
⑥素材	木	81.8%	51.4%	41.2%	30.0%	19.6%	
	アルミ	0.0%	32.4%	35.3%	50.0%	68.6%	
	複数	18.2%	16.2%	23.5%	17.5%	6.5%	
	その他	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%	5.2%	
1階窓	⑦意匠	窓なし	18.2%	10.8%	23.5%	12.5%	12.4%
		サッシ	45.5%	73.0%	70.6%	67.5%	77.8%
		格子	27.3%	8.1%	0.0%	12.5%	3.3%
		複数	0.0%	5.4%	0.0%	7.5%	5.2%
		その他	9.1%	2.7%	5.9%	0.0%	1.3%
	⑧素材	窓なし	18.2%	10.8%	29.4%	12.5%	12.4%
		木	27.3%	37.8%	29.4%	25.0%	14.4%
		アルミ	36.4%	45.9%	41.2%	60.0%	66.7%
		複数	9.1%	5.4%	0.0%	2.5%	6.5%
		その他	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
⑨色	窓なし	18.2%	10.8%	29.4%	12.5%	12.4%	
	茶	63.6%	64.9%	52.9%	57.5%	40.5%	
	黒	9.1%	5.4%	11.8%	10.0%	9.2%	
	複数	0.0%	8.1%	0.0%	10.0%	11.8%	
	その他	9.1%	10.8%	5.9%	10.0%	26.1%	
⑩意匠	窓なし	54.5%	21.6%	11.8%	7.5%	12.4%	
	サッシ	36.4%	59.5%	58.8%	65.0%	75.8%	
	格子	0.0%	10.8%	17.6%	15.0%	6.5%	
	複数	0.0%	2.7%	0.0%	12.5%	5.2%	
	その他	9.1%	5.4%	11.8%	0.0%	0.0%	
⑪素材	窓なし	54.5%	21.6%	11.8%	7.5%	11.8%	
	木	18.2%	21.6%	17.6%	30.0%	12.4%	
	アルミ	18.2%	54.1%	64.7%	50.0%	70.6%	
	複数	0.0%	2.7%	5.9%	10.0%	5.2%	
	その他	9.1%	0.0%	0.0%	2.5%	0.0%	
⑫色	窓なし	54.5%	21.6%	11.8%	7.5%	11.8%	
	茶	36.4%	62.2%	47.1%	55.0%	43.8%	
	黒	9.1%	8.1%	5.9%	7.5%	3.9%	
	複数	0.0%	2.7%	5.9%	2.5%	11.8%	
	その他	0.0%	5.4%	29.4%	27.5%	28.8%	
1階窓周り意匠	⑬意匠	窓なし	18.2%	8.1%	0.0%	0.0%	5.2%
		格子	36.4%	27.0%	23.5%	25.0%	24.8%
		てすり	0.0%	2.7%	5.9%	5.0%	2.0%
		該当なし	27.3%	56.8%	70.6%	70.0%	62.1%
		その他	18.2%	5.4%	0.0%	0.0%	5.9%
⑭素材	窓なし	18.2%	67.6%	70.6%	70.0%	69.3%	
	木	45.5%	27.0%	23.5%	20.0%	17.0%	
	アルミ	0.0%	5.4%	0.0%	7.5%	11.8%	
	該当なし	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	その他	9.1%	0.0%	5.9%	2.5%	2.0%	
⑮色	窓なし	18.2%	67.6%	70.6%	72.5%	67.3%	
	茶	45.5%	32.4%	17.6%	25.0%	24.2%	
	黒	9.1%	0.0%	11.8%	0.0%	2.6%	
	該当なし	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	その他	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%	5.9%	
2階窓周り意匠	⑯意匠	窓なし	54.5%	18.9%	11.8%	7.5%	15.0%
		格子	36.4%	16.2%	11.8%	12.5%	8.5%
		てすり	0.0%	13.5%	5.9%	25.0%	25.5%
		該当なし	9.1%	45.9%	58.8%	47.5%	42.5%
		その他	0.0%	5.4%	11.8%	7.5%	8.5%
⑰素材	窓なし	54.5%	64.9%	70.6%	57.5%	59.5%	
	木	9.1%	27.0%	17.6%	25.0%	14.4%	
	アルミ	9.1%	8.1%	11.8%	10.0%	21.6%	
	鉄	18.2%	0.0%	0.0%	5.0%	3.3%	
	該当なし	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
⑱色	窓なし	54.5%	64.9%	70.6%	55.0%	60.1%	
	茶	18.2%	32.4%	17.6%	30.0%	30.1%	
	黒	18.2%	0.0%	0.0%	5.0%	1.3%	
	該当なし	9.1%	2.7%	0.0%	0.0%	0.0%	
	その他	0.0%	0.0%	11.8%	10.0%	8.5%	

また、昭和前期では複数、昭和後期・平成では吹付が最も多く使用されている。複数が使用される要因として、建築物の経年劣化が挙げられる。これに伴う修繕や修景において、新旧の素材や技術が組み合わせられた結果であると考えられる。

【出入口】表 1. ⑤⑥より、素材は、江戸期から大正期では木が最も多く使用されており、特に江戸期では 80.8%を占めている。昭和前期以降ではアルミが過半数を占め、最も多く使用されている。明治期から昭和後期・平成で、木の使用割合が 81.8%→19.6%と減少傾向が見られ、同時にアルミの使用割合が 0%→68.6%と増加傾向が見られる。これは、新たな技術の台頭により耐久性やメンテナンス性を追求した結果であると考えられる。

【窓】表 1. ⑦から⑩より、1 階窓及び 2 階窓は、全年代を通じて意匠ではサッシが最も多く使用されている。サッシの使用割合は江戸期から昭和後期・平成にかけて、1 階窓では 45.5%→77.8%、2 階窓では 36.4%→75.8%と増加傾向にあり、1 階窓、2 階窓共に明治期以降、過半数を占めている。

素材は、1 階窓及び 2 階窓は、アルミの使用割合が江戸期から昭和後期・平成にかけて増加しており、昭和前期以降、アルミの使用割合が過半数を占める。色は全年代を通じて茶が多く使用されている。江戸期以降、窓に関して、意匠はサッシ、素材はアルミの使用割合が増加した。しかし、色は茶の使用が依然として多く見られる。

これは、耐久性やメンテナンス性を追求しただけではなく、町並みへの配慮を重視した結果だと考えられる。

また、1 階窓周り意匠は、全年代を通じて意匠は格子、表 2 竹田修景ガイドラインと各年代のデザインコードの比較

素材は木、色は茶が最も多く使用されている。2 階窓周り意匠は、江戸期から大正期では格子が最も多く使用され、昭和前期以降は手すりが最も多く使用されるようになる。江戸期以降、格子の使用割合は 81.8%→19.6%と減少傾向が見られる。一方、手すりの使用割合は 0.0%→25.5%と増加し、昭和前期以降では最も多く使用されている。よって、窓周り意匠に関して江戸期以降に格子の使用割合が減少し、手すりの使用割合が増加したのは、格子の装飾性の重視よりも、転落防止を目的とした安全性を重視したためと考えられる。

4 助成基準の提案

竹田城下町地区では、「竹田市歴史的町並み景観形成等補助金交付要綱」(2005 年)及び竹田市修景ガイドライン(1997 年)⁴⁾に基づき、助成が行われている。しかし、竹田市修景ガイドラインには、各年代のデザインコードに関する具体的な基準はない。本章では、各年代の助成基準を提案するために、各年代のデザインコードを整理する。さらに、竹田修景ガイドラインにおける建築物の形態・意匠の基準を把握し、3 章で抽出した各年代のデザインコードと比較する(表 2)。

4-1 各年代のデザインコードの整理

表 2 より、江戸期、明治期、大正期では瓦葺きの屋根、白漆喰仕上げ、木製の出入口、木製又はアルミ製のサッシ、窓周りの格子が共通のデザインであると考えられる。

また、昭和前期、昭和後期・平成では瓦葺きの屋根、アルミ製の出入口、アルミ製のサッシ、窓周りの手すりが共通のデザインであると考えられる。

この 2 つの年代ごとの共通デザインには乖離が見ら

外観構成要素	カテゴリ	竹田修景ガイドライン	年代別のデザインコード				
			江戸期	明治期	大正期	昭和前期	昭和後期・平成
写真							
	屋根	形状 勾配屋根 葺き方 瓦葺き	入母屋 瓦葺き	切妻 瓦葺き	切妻 瓦葺き	切妻 瓦葺き	切妻 瓦葺き
外壁	仕上り材	周囲の町並みと調和した 落ち着いた材質感のある もの	漆喰	漆喰	漆喰と複数	複数	吹付
	色	白色、灰色、茶色系統	白	白	白	白	白
出入口	意匠	伝統的様式を基本	格子戸	戸	戸	複数	戸
	素材	木材、アルミサッシ	木材	木材	木材	アルミ	アルミ
1階窓	意匠	伝統的様式を基本	サッシ	サッシ	サッシ	サッシ	サッシ
	素材	木材、アルミサッシ	アルミ	アルミ	アルミ	アルミ	アルミ
2階窓	色	黒色、茶色系統	茶色	茶色	茶色	茶色	茶色
	意匠	伝統的様式を基本	サッシ	サッシ	サッシ	サッシ	サッシ
1F窓周り意匠	素材	木材、アルミサッシ	木材	木材	木材	木材	木材
	色	黒色、茶色系統	茶色	茶色	茶色	茶色	茶色
2F窓周り意匠	意匠	伝統的様式を基本	格子	格子	格子	手すり	手すり
	素材	木材、アルミサッシ	鉄	木材	木材	木材	アルミ
	色	黒色、茶色系統	黒色、茶色	茶色	茶色	茶色	茶色

れる。そのため、竹田市のデザインコードは江戸期、明治期、大正期のデザインコードと昭和前期、昭和後期・平和のデザインコードに二分できると考える。

4-2 竹田修景ガイドラインの建築物基準の把握

表2より、竹田修景ガイドライン(1997年)⁴⁾では屋根に関して、「瓦葺きの勾配屋根」と定めているが、詳細な屋根形状については定められていない。外壁に関して、色の指定はあるものの、仕上げ材は「周囲の町並みと調和した落ち着いた材質感のあるもの」と定めているが、具体的な指定はない。また、出入口及び窓に関して、色の指定はあるものの、意匠及び素材は「伝統的様式を基本とする」と定めているが、具体的な指定はない。

4-3 助成基準の提案

江戸期、明治期、大正期のデザインコードと昭和前期、昭和後期・平成のデザインコードを基に、表2を参照しながら今後の助成基準を提案する。

【江戸期、明治期、大正期のデザインコード】表2より、江戸期、明治期、大正期のデザインコードは、“瓦葺きの屋根”，“白漆喰仕上げ”，“木製の出入口”，“木製又はアルミ製のサッシ”，“窓周りの格子”である。また、竹田修景ガイドラインでは、屋根の形状、外壁の仕上げ材、出入口及び窓の意匠と素材の具体的な指定はない。したがって、助成基準は「江戸期から大正期に建てられた建築物の屋根は入母屋又は切妻を推奨する。」「外壁は、漆喰仕上げを推奨する。他に、現代の新素材や技術を用いて、漆喰風を再現した外壁仕上げも助成対象とする。」「出入口は木製の格子戸又は戸を推奨する。」「窓は木製又はアルミ製のサッシ、窓周り意匠は木製又は鉄製の格子を推奨する。」と考える。

【昭和前期、昭和後期・平成のデザインコード】表2より、昭和前期、昭和後期・平成のデザインコードは“瓦葺きの屋根”，“アルミ製の出入口”，“アルミ製のサッシ”，“窓周りの手すり”である。また、竹田修景ガイドラインでは、屋根の形状、外壁の仕上げ材、出入口及び窓の意匠と素材の具体的な指定はない。したがって助成基準は「昭和前期以降に建てられた建築物の屋根は切妻を推奨する。」「出入口はアルミ製の戸を推奨する」「窓はアルミ製のサッシ、窓周り意匠は木製の格子及び木製又はアルミ製の手すりを推奨する」と考

える。また、外壁の助成基準は、伝統的な漆喰仕上げを推奨しつつ、今後昭和後期・平成以降も増加すると考えられる吹付やサイディング等の新素材の基準を定めることも視野に入れるべきであると考えられる。

5 総括

本研究では、竹田城下町に着目し、建築年代が特定できる建築物を対象に現地調査を実施した。この調査結果を基に、各年代のデザインコードを抽出し、特徴的な傾向が見られる江戸期、明治期、大正期のデザインコードと昭和前期、昭和後期・平成のデザインコードに分け、これらのデザインコードに即した助成基準を提案した。

【江戸期、明治期、大正期のデザインコード】“瓦葺きの屋根”，“白漆喰仕上げ”，“木製の出入口”，“木製又はアルミ製のサッシ”，“窓周りの格子”である。

【昭和前期、昭和後期・平成のデザインコード】“瓦葺きの屋根”，“アルミ製の出入口”，“アルミ製のサッシ”，“窓周りの手すり”である。

以上より、竹田城下町の江戸期、明治期、大正期のデザインコードと昭和前期、昭和後期・平成のデザインコードを抽出し、助成基準を提案した。しかし、竹田修景ガイドラインから建築年代が特定できた建築物の調査に限られる。そのため、同地区の全建築物を対象により詳細なデザインコードの抽出と、そのデザインコードを維持、保全するための助成基準を検討することを今後の課題とする。

【補注】

注1)本研究におけるデザインコードとは、一定地域のまちなみ景観を構成する建築物の形態・意匠である「屋根」・「外壁」・「出入口」・「窓」の要素に見出せる共通のデザインと定義する。

注2)竹田修景ガイドライン(1997年)⁴⁾から「VIII 建築年代別色分け図(建築現状調査)」に示された建築年代を利用する。

注3)竹田修景ガイドラインには、修景整備モデルの例として、勾配屋根(切妻、入母屋)の屋敷型建築物、町屋型建築物のイラストが明記されているが年代ごとの修景モデルは明記されていない⁴⁾。

注4)現在の敷地が明らかに多様な建築物を対象外とした。

注5)表1の項目⑮から⑳の「該当なし」は、窓はあるが窓周り意匠がないものとする。

【参考文献】

- 1)文化庁(2021.3)「伝統的建造物群保存制度の実務手引き」p12-13
- 2)林直孝, 浅野聡, 森河奨(2015.9)「歴史的市街地における建築物の修景事業に対する助成制度に関する研究-東海4県の景観行政団体を対象にして-」日本建築学会計画系論文集, vol. 80, No. 715
- 3)台東区役所(2022.4)「谷中地区景観形成ガイドライン」p13-15
- 4)竹田市(1997)「竹田地区街並み形成景観・修景ガイドライン」p31-33
- 5)竹田市(2016.3)「竹田市景観計画」p25

*1 大分大学理工学部創生工学科建築学コース 学部生

*2 大分大学理工学部理工学科建築学プログラム 准教授 博士(工学)

*3 大分大学大学院工学研究科博士前期課程 大学院生

*1 Undergraduate Student, Oita Univ.

*2 Associate Professor, Faculty of Science and Technology, Oita Univ, Ph.D.

*3 Graduate Student, Oita Univ.